うつろう感情の在り処

岩崎 務

ギリシア文学最古の作品であるホメロスの叙事詩『イリアス』が描くのはもちろんトロイア戦争であるが、冒頭で詩人が明示するそのテーマは、「アキレウスの怒り」であり、戦争の帰趨を左右することになる英雄の激しい感情であった。実際、詩中では、アキレウスのみならず、英雄たちを中心とする様々な人物たちが抱く特に大きな怒り、悲しみ、不安などが、戦況の経過の中で折々に表現されていく。しかしながら、ドッズが『ギリシア人と非理性』において述べるところでは、ホメロスの場合、人間を動かす激情や、そのほか行動における非理性的な要素は、神々、あるいは神的なものによる超自然的な干渉に帰するものとされており、登場人物自身の語る言葉にもそのような認識がうかがえる。そのような感情が湧き上がるのは人間には抗いがたいことであり、したがって、叙事詩人の語りにおいては、人物の内面に深く入り込んでそこに潜む感情があらわに描き出されるようなことはない。

ホメロス以後には、古典文学においても、自己の感情、人間の内面に目を向ける姿勢が見られるようになるが、その始まりを画するのが抒情詩の出現である。スネルは『精神の発見』において、ギリシア抒情詩の初期の詩人たちが、まだ限定された範囲においてではあるが、感情を自己に固有の個人のものとして意識し見つめていることを鋭く分析している。たとえば、女性詩人サッポーの恋の喜びと苦悩を表わした詩の断片「四肢をとろかすエロースが、ふたたび私の身を揺すぶるのだ、甘くてまた苦い、御しがたいあの獣が…」について、スネルは、恋は彼女の内部から生じる感情ではなく、エロース（愛）という神格によるものとされているが、「この寄る辺ないという感情は、言葉の完全な意味で彼女固有のもの、彼女個人の所有物である」と論じている。

さらに時代が下がって、ギリシア悲劇が現れてくると、ドッズが指摘するように、エウリピデスの作品では、恐るべき情念は人間の理性に外から襲いかかるものではなく、人間自身の内部に存在することを意識している人物の台詞が見られる。たとえば、『メデイア』において、亡命先の王女との結婚により自分を裏切ろうとするイアソンに対して、彼との間にもうけた子供を殺すことによって復讐を計画するメデイアが、子供への愛情との葛藤の中で吐く有名な独白である。

わたしにだって、自分がどれほどひどいことをしようとしているかぐらいわかっている。
だけどそれをわたしにやらせようとしているのは、
この胸のうちに燃える怒りの焔。

（丹下和彦訳『エウリピデス悲劇全集1』京都大学学術出版会より）

この個所をどう解釈し訳すかは大きな議論となっているが、「怒りの焔」と訳されている原語はテューモスであり、情念や激しい感情を意味していると解され、ここではメデイアにおける感性と理性の相克が吐露されているとするのが従来の一般的な捉え方となっている。ソクラテス以前の哲学者ヘラクレイトスの断片にはテューモスを魂との関係で論じているものがあり、その断片には理性と感情の対立が含意されているとの解釈もなされている。理性と感情の関係は早くから哲学者たちが取り上げた問題であり、プラトンの有名な魂の三部分説では、理知、気概、欲望の区分があると説かれ、気概と訳されている語はテューモスであり、やはり非理知的なものとされ、感情はここに割り当てられている。文学を専門領域とする筆者には哲学者たちの感情に関わる議論をたどることはやや手に余るところなので、廣川洋一『古代感情論――プラトンからストア派まで』を手に取ってほしい。

いわさき・つとむ　総合国際学研究院教授　西洋古典文学

文献案内

E・R・ドッズ『ギリシア人と非理性』岩田靖夫，水野一共訳、みすず書房、一九七二年
B・スネル『精神の発見――ギリシア人におけるヨーロッパ的思考の発生に関する研究』新井靖一訳、創文社、一九七四年
廣川洋一『古代感情論――プラトンからストア派まで』岩波書店、二〇〇〇年